

# 飯香浦地蔵まっりの現在

才津 祐美子\*・洲鎌 成子\*\*・高谷 美玲\*\*・水田 稚菜\*\*・森 由里亜\*\*

## The Current State of “Zizo-Matsuri” in Ikanoura-area, Nagasaki-city

Yumiko SAITSU, Nariko SUGAMA, Mirei TAKATANI, Wakana MIZUTA and Yuria MORI

### Abstract

Cultural heritages all over Japan are also getting attention in the World Heritage boom. However, cultural heritages are not necessarily tangible. Intangible heritages are also humankind's historical artifacts. In Japan, protection system for intangible cultural heritages was established, which was the first in the world. To figure out the total intangible folk cultural properties all over Japan, several inventory surveys had done in the past. These surveys are very efficient to know the existence of event, however, they are not enough as reports of each event contents. Also on “Ikanoura Zizo-Matsuri(Zizo-Festival)” that we picked as a case study in this paper, the reports are far from detailed, though Nagasaki prefecture government conducted several surveys in the past.

Thus, the first aim of this paper is to delineate the current state of Ikanoura Zizo-Matsuri which is an intangible folk cultural properties. We also attempt folkloric analysis, consideration on historical change, in the range that we need for current examination. In addition, at the end of the paper, we mention about the issue that this event has.

**Key Words:** Intangible Folk Cultural Properties, Zizo-Matsuri(Zizo-Festival), Kazari-Somen(Noodle-Decorations), Nenbutsu(Buddhist Invocation)

### 1. はじめに

世界遺産ブームによって日本各地の文化遺産も注目されている。ただし、文化遺産は何も形あるものだけではない。無形の文化遺産もまた人類の歴史的所産である。ユネスコにおいても、2003年に「無形遺産の保護に関する条約」が採択され、2008年からは締約国の無形文化遺産が代表リストに登録されている。日本の無形文化遺産も、2008年に3件が、2009年には13件が登録されている。この2009年に登録された13件のうち10件が国指定重要無形民俗文化財で占められている。国指定の文化財ということもあり、これらの文化遺産が消滅または継承の危機に直面している状況にあるわけではないが、そもそもこのような制度はそうした危機意識からはじまっているといっても過言ではない。そして実際、多くの

無形文化遺産が記録さえも残されぬまま消滅しているのである。

日本においては世界に先駆けて無形の文化財に関する保護制度が創設され、現在では無形文化財、無形民俗文化財、選定保存技術として保護されている。このうち各地に遺る無形民俗文化財に関しては、未指定のものも含めた文化財全体の現状を把握するために、過去何度か国庫補助事業による悉皆調査が行われてきた。

しかし、こうした悉皆調査は、行事の存在を知るのには大変有効だが、一つ一つの行事内容の報告としては不十分なものが多い。本稿で事例として取り上げる「飯香浦地蔵まっり」に関しては、先述した国庫補助事業の一環として長崎県が行った民俗芸能・民謡等基本調査(1975年－1979年)や民俗芸能緊急調査(1993年－1994年)、祭り・行事調査(1999年－2001年)において調査・報告されている(長崎県教育委員会、1978；1995；2002)が、まつりの一部分である「飾りそうめん」が1975年に長崎市指定無形民俗文化財になった際に作られた資料<sup>(1)</sup>(B5用紙1枚

\*長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

\*\*長崎大学環境科学部 学生

(受理年月日 2011年5月1日)

程度)以上に詳しいものは存在しない。

よって、本稿の第一の目的は、飯香浦地蔵まつりの現状を具に明らかにすることにある。また、現状の把握に必要と思われる範囲内ではあるが、行事の民俗学的分析や歴史的変遷の考察についても行うものとする。さらに、本稿の最後では、本行事が抱える課題についても若干言及したい。

## 2. 方法

### 2.1. 調査地の概要

本研究の調査地は長崎市飯香浦町である(図1)。飯香浦町はかつて長崎県西彼杵郡茂木町(1919年以前は茂木村)の一部であったが、1962年に行われた第7次市域拡張により茂木町が長崎市に編入されたため、長崎市茂木町飯香浦名となった。その後1971年に町名変更で長崎市飯香浦町となって現在に至っている。

「飯香浦」という地名の由来は、次のように伝えられている。神功皇后が三韓出兵のためにこの地を訪れた際、小高い場所にある岩の上で昼食に飯を炊いた。その飯の蒸れる良い香りは、風に乗って村人たちの元まで届いた。以来この地を飯香浦と呼ぶようになったという。また、この飯を炊いた岩を「甑岩」と呼ぶようになり、現在ではその場所に甑岩神社が建立されている。



図1 飯香浦町の位置

注：才津が作成

2010年の飯香浦町の人口及び世帯数は、人口数712(男性340、女性372)、世帯数237である。人口は年々減少している上に、人口の約3分の1が60歳以上(2005年国勢調査)であるなど、過疎化と少子高齢化が進んでいる(図2)。また、近年長崎市中心街と茂木地区を結ぶ道路が整備されてから、飯香浦町を含む茂木地区は活力を失ってしまった感がある。

飯香浦町の主たる産業は農業である(図3)。年々減

少してはいるものの、1995年の国勢調査でも、約6割の人が農業に従事していることがわかる。主な作物は、葉物野菜をはじめとする野菜全般や枇杷・いちご等の果物、菊やカーネーション等である。これらは現在直売所を中心に出荷されている。残りの4割は、建設業、卸・小売業・飲食店、サービス業等で生計を立てている。なお、沿岸部にある集落にも関わらず、漁業従事者はいない。

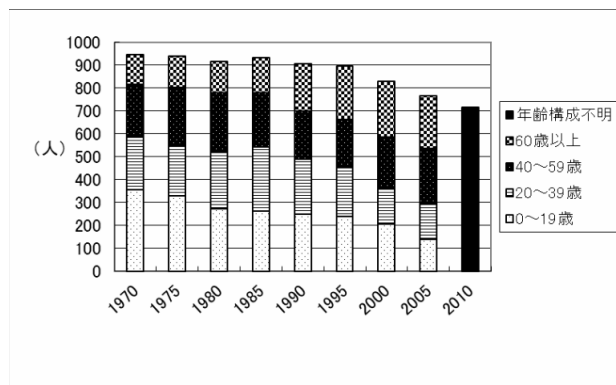


図2 飯香浦町の人口動態

注：国勢調査(1970-2010)より水田が作成

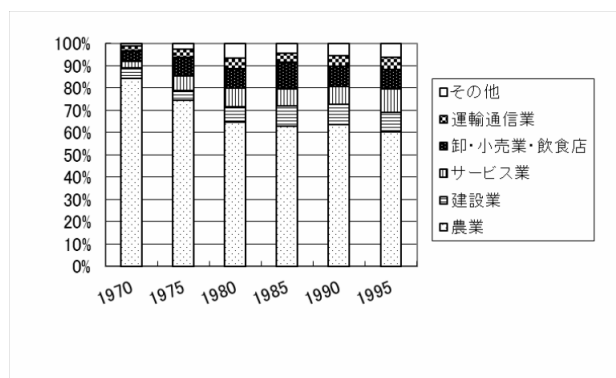


図3 飯香浦町の産業別人口動態

注：国勢調査(1970-1995)より水田が作成

飯香浦町は、飯香浦と片峰の2つの自治会から成っている。さらに飯香浦自治会は、上、石垣、下の3つの部落<sup>(2)</sup>に分類される(片峰自治会は片峰部落のみ)。各部落の戸数は、上30、石垣23、下40、片峰70である。

また、飯香浦町には、日吉神社と甑岩神社の2つの神社が存在する。日吉神社は飯香浦町と隣の太田尾町(太田尾自治会と山川河内自治会から成る)が共同で祀っており、この2つの町の住民が日吉神社の氏子である。甑岩神社は飯香浦町の住民によって祀られている。また飯香浦町と太田尾町のほとんどが長崎市茂木町にある玉台寺(浄土宗)の檀家である。

飯香浦町のその他の社会組織として現存するのは、

JA 青年部と女性部、そして「施主」と呼ばれる地蔵まつりを主催する集団である。また、片峰部落のみ獅子舞の保存会がある。施主については次章で詳述する。

## 2.2. 調査方法

本研究のためのフィールドワーク(聞き取り調査および参与観察)は2010年7月23日、24日に行った。その後、9月19日、12月13日、2011年4月21日に補足調査を実施した。また、適宜文献資料調査や電話による聞き取り調査も行った。

## 3. 地蔵まつり

地蔵を祀る祭祀には、地蔵まつり、地蔵盆等があり、その多くが7月23、24日か8月23、24日に行われている。このうち地蔵盆という名称で行われているものは、近畿地方に偏った分布を示している(林, 1997)。地蔵まつりの方は地蔵盆より全国的な広がりを持つようだが、その行事内容は実に多彩である。本稿で取り上げる飯香浦地蔵まつりはその装飾と「念仏」(飯香浦町では「鉦張り」と呼んでいる)に特徴があり、隣町で行われている太田尾地蔵まつり(「地蔵そうめん祭り」と表記されている場合もある)以外は、管見の限り、類似したものは行われていないようである。ただし、かつてはこの行事を「地蔵まつり」とは呼んでおらず、「24日(にじゅうよっか)」と呼んでいた。以下、その行事内容について詳述する。

### 3.1. まつり当日の流れ

2010年7月23日、24日の飯香浦地蔵まつりは資料1のような流れで行われた。

なお、25日にも祭りの片付け・整理として、地蔵堂の畳上げなどが行われる。

### 3.2. まつりの担い手

地蔵まつりの主たる担い手は、「施主」と呼ばれる集団である。また、自治会も少なからぬ役割を果たしている。よって、ここでは地蔵まつりにおける施主と自治会の役割を中心に考察したい。

#### 3.2.1. 施主

施主は地蔵まつりを運営するための組織であり、まつりの準備から後片付けまで、3.1.で示したまつり全般に関わっている。

2010年現在は20戸(上・下・石垣・片峰各部落5戸ずつ)で構成されている。まつりの際は各戸1人が出てくるが、通常それは男性である。男性が出てこられない事情がある場合は、代わりに女性が出てくるが、女性が携わることができる作業は限られてい

る。例えば、地蔵まつりの準備の主要な部分である飾りそうめん等の作製や飾りつけは男性のみで行われることになっており、女性は団子の作製やまかな

#### 資料1

##### 7月23日

- 8:00 地蔵まつりの準備開始  
各部落の公民館：鉦磨き  
地蔵堂境内：団子(8kg分)作製  
地蔵堂内：飾りそうめんを使用するそうめん以外の飾り作製  
提燈、旗、幕などを設置
- 10:30 飾りそうめん(鎧兜2体)を作製
- 12:00 屋台業者が出店の準備開始  
休憩(昼食)
- 13:00 団子を細く切った竹に刺す(80本程度)  
団子や饅頭、落雁の飾りを作製  
飾りそうめん(幔幕)を作製
- 15:00 作製した飾りすべてを地蔵の周りに配置  
地蔵堂内用の提燈を飾り、線香・燭台を準備  
成尾地蔵の御姿を押しした御札を作製  
磨き終わった鉦が各部落から地蔵堂に集められる
- 16:00 準備完了  
参詣者が訪れはじめる
- 19:00 玉台寺の僧侶(3人)が来て、念仏をあげる
- 19:30 鉦張り開始  
(この後、数時間おきに鉦張りが行われた)
- 22:00 出店終了および撤収
- 25:00 まつりは一旦終了  
その後は数人が地蔵堂に残って夜を明かす

##### 7月24日

- 午前中 「長崎さるく」の参加者(11人)が地蔵堂を訪問
- 14:15 最後の鉦張り開始
- 16:00 「カケ」(鉦張り最後の演目)開始
- 16:30 「カケ」終了と同時に片付け開始  
飾りそうめん(幔幕)を含めた食べ物の飾りを分配  
直会
- 17:00 地蔵まつり終了  
(献酒の施主への払い下げ、賽銭の勘定等が行われた)

いを作る等、男性の裏方的な作業を行っている。

また、20戸のうち毎年1戸が、地蔵まつりの一切を取り仕切る「元」を勤めることになっている。元の順番は固定されており、現在の戸数であれば、20年に一度回ってくることになる。元の主な役割は、

①まつりの采配、②費用の管理、③まつりの会場になる地蔵堂の清掃である。清掃はまつりの前後で二度行う必要があるが、これは元とその家族を中心に行われる。かつてはまつりの準備はすべて元の家で行い、それを地蔵堂に運んでいた。そのため、元の家では手伝いに来た他の施主の接待もしなければならなかった。また、まつりの備品も元になった家が毎年引き継ぐ形で管理していた。しかし、そうした接待や備品の個人管理は大きな負担であった。そこで、昭和50年代後半に地蔵堂の増築工事が行われたのを契機に、準備も備品管理も地蔵堂で行うことになった。

現在施主は「飯香浦地蔵まつり保存会」とも呼ばれている。これは1975年に「地蔵まつり飾りそうめん」が長崎市の無形民俗文化財に指定された際に、管理責任者の名称としてつけられたものである。

### 3.2.2. 自治会

先述したように、飯香浦町には2つの自治会(飯香浦自治会および片峰自治会)があり、それがさらに4つの部落(上・下・石垣と片峰)に分かれている。地蔵まつりにおける自治会の主な役割は、鉦張り(3.4.で詳述)に関するものである。

鉦張りは4つの部落が順番に担当しており、その年の担当部落は「鉦元」と呼ばれる。ちなみに、2010年の鉦元は下部落であった。鉦元の部落では、希望者(男性のみ)を募り、まつりの1ヶ月前くらいから公民館で鉦張りの練習を行う。まつり際には、鉦元の部落で鉦張りを行う人を出さない家からも1戸につき1人は来て(施主同様、基本的には男性、無理な場合は女性でも可)、鉦張りを行う人々の後ろに座って参加することになっている。

鉦元でない部落にもまつりのための役割がある。鉦張りで使用する鉦は部落ごとに管理しており、まつり当日の朝からそれを磨いて地蔵堂に持ってくるのである。鉦は全部で10個あり、上部落3個、下・石垣部落合同で4個、片峰部落3個、をそれぞれ管理している。

また、地蔵堂内の飾り付けは施主のみで行われるが、堂外の飾り付けは自治会(部落)の人々も参加する。これらも全て基本的には男性によって行われている。

なお、まつりの費用は、賽銭と飯香浦・片峰両自治会に属する全戸から500円ずつ徴収した「灯明銭」で賄われている。また、地蔵堂の修理が必要な際も2つの自治会全体で負担している。

### 3.2.3. ワッカモンシュウ(若者衆)

1960年頃まで飯香浦町には部落ごとにワッカモンシュウ(若者衆)が存在していた。ワッカモンシュ

ウは、15歳から結婚するまでの男子で構成されていたという。彼らは地蔵まつり際には鉦張りや参詣者の接待を任されており、まつりの重要な担い手だった。接待というのは、木製の組み立て小屋を港と境内の2か所に建て、参詣者にお茶出し等を行っていたことを指す。港の小屋は、当時は多かつた遠方から船で訪れる参詣者のために設けられたものだった。

現在では、港にも境内にもこのような小屋は設けられていない。鉦張りに関しては、前項で述べたように、各部落がその役割を果たしている。

また、ワッカモンシュウは、地域社会においても重要な役割を果たしていた。地域の他のまつりにも加勢する他、葬式の時には情報伝達や火付け等の役割を担っていた。

## 3.3. 地蔵の装飾

飯香浦地蔵まつりでは、地蔵を中心に供物や提灯でさまざまな飾りつけがなされている。2010年のまつりでは、以前撮った写真を参照しながら地蔵堂内部の飾りつけおよび配置を行っていた。以下、その飾りつけについて詳述していく。

### 3.3.1. 飾りそうめん

このまつりの最大の特徴として、「飾りそうめん」がある。地蔵を飾る「鎧兜」2体と「幔幕」を「生そうめん」を編んで作製するのである。この生そうめんは、単なる乾燥させる前のそうめんではない。通常のそうめんの数本分の太さで、10尺(3.03m)の長さのものを特注で作ってもらっているのである。生そうめんは毎年約15kg用意され、鎧兜と幔幕にそれぞれ約7.5kgずつ使用される。そうめん職人の減少に伴い、この50年でそうめんの購入先が4ヶ所も変わったという。現在は長崎市新大工町の春野製麺から購入している。かつては諫早市飯森町や小野島町まで船や徒歩で買いに行ったこともあったらしい。

飾りそうめんの製作場所は地蔵堂内部の本堂脇の部屋である。生そうめんは乾燥を嫌うため早く編んでいかなければならない。空気が乾燥している時は縁側にビニールでしきりを作り湿度を保ちながら行う。

ちなみに、島原にも飾りそうめんが存在しているが、乾麺(通常のそうめんの長いままのもの)を使用するという点が飯香浦町の飾りそうめんとは異なっている。乾麺であるため、加湿器で湿らながら編むそうである。

鎧兜と幔幕の製作過程の詳細は以下のようなものである。

#### ①鎧兜

竹の棒を芯にして麦わらを巻き付け円柱形にし、その上に紙を貼った土台を2台用意する。それを円柱形のブリキの入れ物の上に乗せ、土台の周囲にそうめんを編んで装飾を施す(図4)。使う道具は竹べらで、1体につき3~4人で作業をする。なお、そうめんを編むのは参詣者から見える正面のみである。

まず、そうめんをいくつかの束にし、細長い紅白の紙を格子状に挟み込みながら4段作り、紙を裏側で貼り合わせる。次に紙より下の部分をそうめんのみで4段編み、それ以降は編まずに垂らしたままにする。その際、そうめんと土台の間に金または銀の紙を挟む。さらに、今度はそうめんの上から紅白の帯を締める。そして、土台上部から突き出た棒を金(銀)紙で覆い、その棒に別のそうめんの束を掛けて兜の部分を作る。最後に兜の上部に飾りをつけると完成である。金の鎧兜は男性、銀の鎧兜は女性を表しているという。

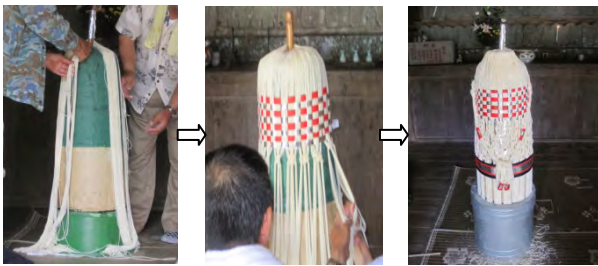


図4 鎧兜の製作過程

注：2010年7月23日高谷撮影

## ② 幔幕

太い竹の棒を天井から横に吊るし、そこにそうめんの束を掛ける(写真1)。そして複数の人が横一列になって、別々の箇所から編んでいく。時折そうめんを均等にしたり、編み目のずれを確認したりする者もあり、総勢6~7人で行われる。全体の3分の1ほどを編むと、編みはじめと編み終わりの部分を表と裏から棒で挟んで固定し、編まなかった残りの部分はそのまま垂らし、裾を切り揃える。実際に飾りつける際には、地蔵が見えるように真ん中を紐で左右に開ける(写真3)。

なお、このそうめんの編み方は多くの文献で「リリアン編み」と書かれているが、実際はリリアン編みとは異なるものである。

編み手として決まった人がいるわけではなく、その時々メンバーの中で習熟した人が周りに教えながら編んでいく。まつりの前に1回だけロープを使って練習するが、本物の生そうめんは扱いが難しく、なかなかうまくいかないという。編み目が揃って

ない場合や間違った場合にはほどいて編み直す。

この飾りそうめんは非常に珍しいものとみなされており、以下の理由により1975年に長崎市の無形民俗文化財に指定されている。

小麦の生産地でもないこの地方に、そうめん編みの技術が伝承されていることは稀有であり、民俗資料として珍しい。都市化の波と都市との交流が盛んになる時、この民俗技術を保持することは、農民文化を知るために大切であり、市の文化財としての価値がある<sup>(3)</sup>。

ちなみに、幔幕はまつりが終わると解体され、施主に配られる。1年に1度しか食べることができないため彼/彼女らの楽しみとなっている。



写真1 編み終わり時の幔幕

注：2010年7月23日高谷撮影

### 3.3.2. その他の供物兼装飾品

#### ① 団子(写真2、写真3)

境内(地蔵堂前)で男女15名ほどの人が作る。まず、市販の団子粉8kg分を水でこね、直径約1.5cmの大きさに丸める。その後、湯を沸かした鍋で茹で、湯から引き上げた後は、団子同士がくっつかないように粉をまぶして冷ましておく。団子が冷めたら、竹を細く切った長さ50cmほどの串に刺していく。全部で80本ほど作り、それを半分ずつ鎧兜と同じ麦わらの土台2台に元結いで縛りつける。最後に土台の下部に杉の葉と半紙を括りつけて完成する(饅頭、落雁も同様)。なお、土台に飾りつける作業だけは男性のみで行った。また、この団子の一部はお櫃に入れておき、和紙に包んで参拝者に5~6粒ずつ配る(写真6)。

#### ② 饅頭(写真3)

饅頭は桃の形をしており、大小二種類ある。小さい方は団子と同じように麦わらの土台に元結いで縛りつける。その後、土台の上部に金銀の御幣の形をした飾りを挿す。大きな桃饅頭3個は、それ自体で囲いを作るように元結いで縛り、頂点の隙間に杉の葉を挿しこむ。これは供物を置く台の中央に供えら



写真2 飾りつけ前の供物  
注：2010年7月23日 才津撮影



写真3 飾りつけ終了後  
注：2010年7月23日 才津撮影

れる。これらの饅頭は、今回は網場町の菓子店から購入したものだった。

### ③落雁(写真2、写真3)

落雁は3種類用意し、2種類は団子・饅頭と同様に麦わらの土台4台(1種類につき2台)に元結いで縛りつけ、1種類(大きなもの2個)は4台のうち2台の上部の飾りに使用した。この落雁は茂木の菓子店から購入している。

### ④その他の供物

重ね餅や御飯、献酒(日本酒、ビール)、果物(箱入りのバナナ)なども地蔵の周囲に供えられていた。

### 3.3.3. 提灯その他

### ①提灯

地蔵堂へ続く参道と階段には、長さ50cmほどの提灯が等間隔に吊り下げられる(写真4)。地蔵堂内にもその提灯が2つと少し長めの円柱形の提灯が2つ、そして一際大きな丸い提灯1つが天井から吊り下げられる(写真5)。提灯の絵柄は赤・黄・青の鮮やかな色合いの幔幕が描かれたもので、その幔幕には卍や



写真4 地蔵堂周囲の提灯  
注：2010年7月23日 高谷撮影



写真5 地蔵堂内の提灯  
注：2010年7月23日 高谷撮影

松、花の模様がある。また、全ての提灯に奉納した人の住所と名前が書かれている。

### ②掛け軸

1933年に長崎新聞社主催で行われた「西九州霊場聖地投票」で成尾地蔵堂が4位に選ばれた(長崎新聞、1933)。この記念に当時の県知事鈴木信太郎氏から自筆の書を貰い受けたもので、まつりの時のみ地蔵堂に飾るようにしている。

### ③御姿

6.5×14cmの和紙に地蔵の木版を押したもので、参拝者に団子と共に配られる(写真6)。この木版の裏面

には天文2年(1533年)と刻字されており、同年に地蔵堂は建立されたといわれている。かつては災厄から守ってもらうためにこの御姿を家に貼っていたそうだが、今では御姿を財布に入れておくとお金が貯まる、免許証入れの中に入れると交通事故防止になる、病気が治るなどの御利益があるといわれている。



写真6 参拝者に配られる御姿と団子

注：2010年7月23日才津撮影

#### ④地蔵自体の装飾

普段は地蔵に前掛けを着せているが、まつりの時には脱がせている。

### 3.4. 鉦張り

地蔵まつりの重要な行事として「鉦張り」がある。よって本節ではその内容を詳述したい。

7月23日16時頃に地蔵堂の飾り付けが完了するとともに参詣者が訪れはじめるが、まつりの本格的な開始は19時30分に鉦張りがはじまってからだといえる。

まず、19時に玉台寺の僧侶が3人訪れ、地蔵の前で念仏を唱える。その後すぐに鉦元のメンバー10人が地蔵の前に横一列に正座し、鉦張りがはじまる(写真7)。彼らは揃いの浴衣を着て、手には撞木を1本握っており、それぞれの前には1個の鉦が畳の上に直に置かれている。

この鉦張りを行う人々には決まった名称はないが、地蔵に向かって一番左に座る人を「カシラ(頭)」と呼んでいる。カシラは各演目の口火を切る役割を果たしており、熟練者が担当する。また、カシラが使用するのとは一番音の良い鉦である。

鉦張りの演目と順序は以下の通りである。

①※(鉦起し)

②〈念仏〉

ゴレイ申し込み

二ツ頭

三ツ頭

※(鉦納め)

③カケ

①の※は、23日に鉦張りを開始する時にのみ演奏されるものである。「長崎市指定文化財(飯香浦地蔵まつり飾りそうめん)申請書添付資料」ではこの演目を「鉦起し」と書いてあったが、現在の施主や鉦元によると、特に名称はないということだった。

②は、①終了後から24日のまつり終了までに繰り返し行われるもので、この部分だけの演奏時間は約40分である。②の冒頭はカシラから一人ずつ「ナァアアンモオオオオオホホオオホイドウオホオ、オオホホドーホオ」<sup>(4)</sup>と唱えていくのだが、この部分を特に〈念仏〉と呼んでいる。また、この部分は鉦張りを習得する際の基本だという。その後強弱をつけて唱和しながら演奏が続いていき、最後の「三ツ頭」では、演奏者全員が鉦を強くかつアップテンポで叩きながら唱詞を唱える。そして最後に①と同じものを演奏して終わる。「長崎市指定文化財(飯香浦地蔵まつり飾りそうめん)申請書添付資料」ではこの部分を「鉦納め」と書いてあったが、①と同じ内容であり、やはり名称はないと聞いた。

③の「カケ」は、まつりの一番最後に1回のみ演奏される。この演目は特に習得が難しいとされ、鉦張りの中で唯一鉦元ではなく施主が演奏する演目である。ただし、その難しさから施主の中でもまだ演奏したことがないという人もいた。

飯香浦町の人々はこの鉦張りのことを「双盤念仏」とであると認識している。双盤念仏とは、直径30~50cmほどの鉦を木枠に吊り下げ、木製の撞木で叩きながら「南無阿弥陀仏」を独特のゆるやかな曲調で唱える浄土宗特有の念仏である(小野寺, 1995)。しかし、飯香浦地蔵まつりにおける鉦張りは、演目の内容、唱詞、鉦の使用方法等の形式的な面だけ見ても浄土宗の双盤念仏そのものではない。また、本来双盤念仏は死者供養のための法要として行われるが、飯香浦地蔵まつりには現世利益的要素しか見あたらず<sup>(5)</sup>、鉦張りもまた供養の性質を全く有しないものとして行われている<sup>(6)</sup>。つまり、飯香浦町の鉦張りは、形式的な側面からみても、目的からみても、地域的特色が強い双盤念仏の亜種だといえることができるだろう。

また、飯香浦町には、上・石垣・片峰の部落ごとに行われる小規模のまつりがいくつかあり、その際にもこの鉦張りが行われている。上部落の弘法大師祭(4月21日)・山ノ下の地蔵さんのおまつり(10月

24日)、石垣部落の弘法大師祭(4月21日)・高地蔵大祭(10月24日)・観音様(別名:そうめん観音様)大祭(3月18日)、片峰部落の雪観音のおまつり(12月17日)がそれである。なお、下部落では個人的に祀っている人達はいるが、部落全体で祀ってはいないという。

葬式の際にはこの地域の檀那寺である玉台寺の僧侶を呼び、浄土宗の一般的な念仏を唱えてもらう。しかし、通夜や七日ごとの法要等の回向を飯香浦町の人々のみで行う場合には、浄土宗の念仏とも地蔵まつり等の時の鉦張りとも違うものを唱える。これは「浄土宗の僧侶が唱える念仏を短縮したようなもの」だそうだが、飯香浦町に代々口伝えで伝わってきたものである。飯香浦町ではこれを「回向」と呼んでいる。この「回向」の時も鉦張りと同じ鉦を使う。また、「回向」は故人の身内が中心となって行うという。

こうした複数の「念仏」(飯香浦町でいう鉦張りや「回向」)の存在および行事での用いられ方や、部落を「講内」とも呼んでいることを鑑みると、かつて念仏講のような組織が部落と一致する形で存在していた可能性があるように思われる(現在では念仏講とは認識されていない)。それが地域の様々な行事で「念仏」(鉦張り)を行っていたのであり、飯香浦地蔵まつりはその最大のものだったといえるのではないだろうか<sup>(7)</sup>。



写真7 鉦張り

注: 2010年7月23日才津撮影

### 3.5. 参詣者その他

#### 3.5.1. 出店

まつりの際には、地蔵堂の境内に7つほどの屋台が出る(写真8)。内容は、玩具や食べ物、金魚すくい

などである。営業時間は23日の夕方から22時頃までである。地蔵への参拝や鉦張り見学よりもこの屋台を目当てに集まってくる人々も多いようで、浴衣を着た小中学生や子供連れが遅くまで楽しんでいる。

昭和初期頃までは施主と屋台業者の関わりが深かったという。交通手段の整っていない頃、玩具を買ってもらえる数少ない機会がこのまつりであった。「のぞきからくり」のようなものも来ていたという<sup>(8)</sup>。そのため屋台は今以上に喜ばれ、2日間とも営業していた。泊りがけで店を構えていたため、施主と業者が共に飲み明かすこともあったそうだ。また、まつりの前にも公民館に2~3軒の衣料品店が来たという。人々はまつりに着ていく服をここで買うのを心待ちにしていた。

現在は規模が縮小し、食べ物中心の屋台だけになってしまったが、今もなお地域の人々にとってまつりの際の大きな楽しみとなっているようである。



写真8 屋台を楽しむ人々

注: 2010年7月23日洲鎌撮影

#### 3.5.2. 参拝者

地蔵堂内部に入って地蔵に線香や賽銭をあげる人は周辺地域の高齢者が多かったが、小さな子どもを連れた家族などもみられ、中には地元議員やJA職員などもいた。参拝手順に細かいきまりはなく、個々に線香と賽銭をあげ、手を合わせていた。地蔵堂を出る際に、参拝者には施主から成尾地蔵の御姿と団子が配られる。彼らは堂内に途切れなく訪れ、地蔵を拝んだ後、鉦張りを見学したり、施主らと話をしたり、屋台をのぞいたりして、思い思いにまつりの時を過ごしていた。

かつては船に乗って茂木や深堀、野母崎からも参拝者が訪れていた。泊りがけで来る人や他県から来る人もいたという。こうした遠方からの参拝者が特に減少したのは、1982年7月23日から24日の未明



にかけて発生した「長崎大水害」がきっかけだったという。23日に訪れた参拝者の中には、豪雨のために帰ることができず、地蔵堂で夜を明かした人もいたらしい。それ以来、あまり遠くからは来なくなったそうである。それでも、今も孫を連れて来てくれる参拝者もいる。こうしたことから、この成尾地蔵が篤い信仰を集めていることが偲ばれる。

### 3.5.3. 長崎さるく

長崎さるくとは、2006年に行われた博覧会「長崎さるく博'06」を契機に始まった行政事業であり、長崎市文化観光部さるく観光課が行っている。長崎さるくには現在、長崎遊さるく、長崎通さるく、長崎学さるく、長崎食さるくの4種類があり、長崎学さるくのコースの一つとして「地蔵まつり飾りそうめん」を中心とした見学ツアーが設定されている。飯香浦地蔵まつり保存会は、市の依頼を受け、まつり2日目の午前中にツアー参加者の受け入れを行っている。ツアーコースは、成尾地蔵堂を出発し、丸尾地蔵堂(太田尾地蔵まつり)と日吉神社を巡って成尾地蔵堂へ帰ってくるというものであり、徒歩区間約1.2kmである。飯香浦地蔵まつり保存会会長が各施設の歴史を紹介し、会の女性たちが手料理を振舞う「地元交流型」のツアーとして位置づけられている。定員20名までで、毎年十数名の応募がある。

## 4. 今後の課題

地蔵まつりは飯香浦町の人々にとって最大の年中行事であり、今なお大きな楽しみの一つとなっている。また、まつりの遂行という側面からみても、準備段階から最後の片付けまで施主を中心として滞りなく行われており、現時点では特に問題があるわけではない。しかしながら、まつりの将来的なことを考えると、いくつかの課題も見えてきている。その最たるものは後継者不足だろう。よって、本章では、後継者不足の現状と原因、現在の取り組みについて述べていきたい。

### 4.1. 現状

飯香浦町の人々の地蔵まつりへの関わり方としては、施主、自治会・部落(鉦元や鉦磨き)、参詣者の3通りがある。そのいずれもでいえるのが、若い人の不在である。

施主はかつて30戸いたが、先述したように現在は20戸まで数を減らしている。また、その20戸から出ている人々もほとんど60代以上で占められている。そのため、飾りそうめんの製作過程においても、生そうめんを編む細かい技術を教える方も教えられる方も高齢者、という光景が見られた。こうした技術は上達するのに何十年もかかるといい、本

来ならかなり若いうちから携わる必要がある。

鉦張りの「カケ」以外演目は各部落で演奏するため、部落毎に後継者を募って伝承することになるが、現在参加している人で最も若いのは40代だという。年を取ってしまうと習得が難しいため、できれば18歳くらいから練習するのが望ましいというが、現状はそうなっていない。30年前までは太田尾町と互いに鉦の張り合いをしていたが、若者の減少により行われなくなったという。

参詣者に関しては、一見小さな子どもから高齢者までいるようにみえるが、実際は10代後半から20代にかけての年齢層がほぼ欠落しているようだった。

## 4.2. 要因

後継者不足の背景には、地域の少子高齢化や若年層の他地域への流出に伴う人口減少がある。また、長崎市中心部や東長崎へと通じる道路の整備に伴い、人口が流出したばかりでなく、日用品の購入先もそれらの地域に移ったため、かつて飯香浦町にあった商店の多くが消失するなど、町自体の雇用の場や活気も少なからず失われてしまったようである。

それによりかつてのワッカモンシュウ(若者衆)のようなまつり継承の主体となる組織もなくなってしまった。現在、特に10代後半から20代にかけての年齢層が、就学や地域外および農業以外への就労によって、いわば「地域離れ」あるいは「行事離れ」を起こしているような状態である。

ただし、若い世代が地域の行事に全く関心がないかということ、そうとはいきれない。例えば、片峰部落では獅子舞が行われているが、これを伝承している片峰獅子保存会には、地蔵まつりよりも幅広い年齢層の人々が参加している<sup>9)</sup>。つまり、片峰部落においては、施主や鉦張りといったものには参加しないが、獅子舞には参加するという若者がいるということなのである。要するに、地域に残っている若い世代がいなければいけないが、地蔵まつりの担い手として取り込むのに成功していないというふうにも考察できる。

また、一方で、世代交代がうまくいっていないだけのようにも思われる。施主にしても鉦張りにしても各戸から一人出ればいいことになっているため、60代以上の世代が出ている家ではその下の世代が出てくる必要がない。つまり若い世代がいけないのは、各家での世代交代が行われていないからでもあるのだ。かつてワッカモンシュウが存在した時には各戸から複数の人が出ていたわけだから、それがなくなった今は、もっと意図的な世代交代の仕組みが必要なのかもしれない。

### 4.3. 現在の取り組み

こうした現状に対し、施主たちは今現在大きな不安を抱えているわけではないが、全く楽観視しているわけでもない。施主になるのに制限はないにも関わらず、施主は減少していく一方であるため、新たに施主になる人を増やそうと親睦会を開いたりしているのである。長崎さるくを受け入れたのも、対外的な宣伝効果というよりは、地元の人の関心を高めるためであったという。

また、技術面の継承のために、飾りそうめんの製作過程のビデオ撮影や、鉦張りの録音を試みたりしている人もいる<sup>(10)</sup>。若い世代の後継者がにわかには増加し難い状況のため、こうした試みは今後も必要になってくるものと思われる。

### 5. おわりに

本稿の最大の目的は、7月23、24日に行われている飯香浦地蔵まつりの現状を明らかにすることだった。今回、準備から片付けまで参与観察し、補足調査も行ったことで、その多くを記述することができたと考える。また、最低限ではあるが、本行事の歴史の変遷についても言及した。これによって、これまで詳細な報告がなかった本行事の一端を明らかにできたと思われる。さらに、近い将来大きな課題となるであろう後継者に関する現状を報告するとともに、その要因や現地で行われはじめている取り組みについても考察した。

ただし、この研究はまだ端緒についたばかりであるともいえる。地蔵信仰、飾りそうめん、念仏(鉦張り)それぞれの歴史的空間的位置づけについてももっと考察を深める必要があるだろうし、似ていながらも微妙な差異を生じている太田尾地蔵まつりとの比較研究も重要だろう。また、地蔵まつりに限らず、生業やくらしの変化等、飯香浦町そのものの歴史や現状をもっと具に研究することも大切である。このように課題は山積しているが、一つ一つ取り組んでいきたい。

### 謝辞

本研究を進めるにあたって、峰富士雄さんをはじめとする施主(飯香浦地蔵まつり保存会)の皆様には大変お世話になった。そのご厚情に深く感謝するとともに、心より御礼申し上げます。

また、施主以外の長崎市飯香浦町の皆様、長崎市文化観光部文化財課・さるく観光課、玉台寺にもご協力いただいた。よってここに謝意を表したい。

### 註

- (1)「長崎市指定文化財(飯香浦地蔵まつり飾りそうめん)申請書添付資料」
- (2)ここでいう部落とは、単に集落という意である。
- (3)前掲(1)より抜粋。
- (4)施主の一人に唱詞を書いてもらったものから抜粋した。
- (5)高橋(1982)によれば、日本の地蔵信仰は、「地蔵菩薩を成仏の機縁とすること、多様な現世利益を求めること、および死者に供養を施すこと」の三つを主な契機として行われてきたという。飯香浦地蔵まつりは、このうち現世利益の希求と結びついたもののだといえる。
- (6)長崎新聞の記事(1980)には「両町(飯香浦と太田尾)は平家の落人地区と伝えられており、落ちのびる平家の一族が保存食として大切にしてきた“そうめん”を地蔵堂に飾り、先祖供養をしたのが始まり、といわれている」( () 内は筆者加筆)とし、地蔵まつり全体が「先祖供養のため」と書かれているが、現在はそのような認識されていない。
- (7)「長崎市指定文化財(飯香浦地蔵まつり飾りそうめん)申請書添付資料」や田中(1976)も、飯香浦地蔵まつりは「地蔵信仰と念仏講との結合」という見解を示している。
- (8)前掲(1)参照。
- (9)片峰の獅子舞は、二人の演者で演じる二人立の獅子舞である。獅子を先導するのは金と銀の玉をもった小学生2人であり、彼らに導かれて獅子は牡丹の花を取って観客に配るなどする。他に、中国風の衣装をつけた幼児2人と金と銀の月の輪を被った男性2人が囃子に合わせて舞う。囃子は笛(12人ほど)、鉦(2人)、太鼓(宮太鼓1人、締太鼓3人)で構成されており、10代から60代の男性が担当している。ただし、2010年から締太鼓の演者として小学生女子(2人)も参加している(前年までは演者はすべて男性だった)。獅子舞が披露されるのは、毎年敬老の日前後の日曜日であり、2010年は9月19日に行われた。敬老の日の催しに合わせて公民館前の路上で演じられ、地元の親子連れや高齢者などを中心とした観客を集めている。
- (10)ただし、演奏技術の録音による伝承については、位置によって異なる鉦の音や唱詞を正確に伝わるように録音することができないため断念したという。

### 参考文献

- 小野寺節子(1995)：双盤念仏の音楽性と伝承性—東京都内に伝承される双盤念仏を中心に—。民俗音楽研究, 18, pp.1-13.

- 高橋渉(1982): 京都の地藏信仰. 宮城学院女子大学  
研究論文集, 57, pp.1-24.
- 田中敏朗(1976): 「郷土史散歩 448 飯香浦・太田尾  
地藏尊」『長崎新聞』1976年6月20日.
- 長崎県教育委員会(1978): 『長崎県の民俗芸能・民謡  
(Ⅱ)ー長崎市・大村市・東彼杵郡・西彼杵郡ー』  
長崎県文化財調査報告書第41集.
- 長崎県教育委員会(1995): 『長崎県の民俗芸能ー長崎  
県民俗芸能緊急調査報告書ー』長崎県文化財報告  
書第120集.
- 長崎県教育委員会(2002): 『長崎県の祭り・行事ー長  
崎県の祭り・行事調査報告書ー』長崎県文化財調  
査報告書170集.
- 『長崎新聞』(1933): 『長崎新聞』1933年11月8日  
「飯香浦地藏尊 西九州霊場霊地投票第4位 汗  
かき地藏の由来について」.
- 『長崎新聞』(1980): 『長崎新聞』1980年9月11日  
「わが町まつり 地域シリーズ・長崎9飾りそう  
めん(茂木)」.
- 林英一(1997): 『地藏盆ー受容と展開の様式ー(近畿民  
俗叢書11)』初芝文庫.